

令和二年度

# 浦田定期能 第一回

山班

姥女

白頭

浦田 深野

保浩 貴彦

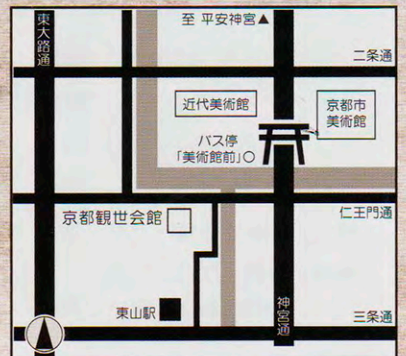
日時：令和2年 3月 20日 (金・祝)

正午開演 (11時20分開場)

於：京都観世会館 (京都市左京区岡崎円勝寺町44)

入場券：前売券 ¥3,500  
当日券 ¥4,000  
学生券 ¥2,000 (全席自由席)

- ◆市バス5・27系統「美術館前」下車
- ◆市バス46・31・201・203系統「東山仁王門」下車
- ◆地下鉄「東山」駅下車、徒歩約5分
- ◆会館東隣に駐車場あり



お問合わせ：浦田定期能楽会 ☎(075)723-6850  
京都観世会館 ☎(075)771-6114

主催：浦田定期能楽会

# 第一回 浦田定期能公演

令和2年 3月 20日(祝)

12:00

解説「本日の曲目について」京都府立大学教授 山崎 福之

12:30

## 能 「班 女」

花	子	深野 貴彦
吉	田 少 将	江崎欽次朗
従	者	大坪 賢明
従	者	松本 義昭
野上の宿の長		茂山忠三郎

( 笛 )	齊藤 敦
( 小 鼓 )	林 吉兵衛
( 大 鼓 )	石井 保彦

(後見) 深野新次郎・宮本 茂樹

(地謡) 浦田 保親・片山 伸吾・吉浪 壽晃・大江 泰正  
大江 広祐・山崎美紗子・山崎 浩之・三木 成弘

— 休 息 20 分 —

## 狂言「腹 不 立」

出	家	茂山千三郎
檀	家	網谷 正美
檀	家	丸石やすし
( 後 見 )		増田 浩紀

仕舞	老 松	杉浦 豊彦
	雲 林 院 <sup>ケ</sup>	浦田 保親
	天 鼓	片山 伸吾

(地謡) 越賀 隆之・味方 玄・分林 道治・大江 泰正

— 休 息 20 分 —

15:20 頃

## 能 「山 姥」 白頭

女	姥	浦田 保浩
百	万 山 姥	浦田 親良
従	者	福王 知登
供	人	廣谷 和夫
供	人	喜多 雅人
里	人	山口 耕道

( 笛 )	森田 保美
( 小 鼓 )	曾和 鼓堂
( 大 鼓 )	山本 哲也
( 太 鼓 )	前川 光範

(後見) 杉浦 豊彦・大江 広祐

(地謡) 越賀 隆之・味方 玄・分林 道治・宮本 茂樹  
山崎美紗子・田中 隆夫・山崎 浩之・三木 成弘

附祝言

終了予定 17:00頃

## 能 班 女 (はんじょ)

中国の前漢時代の女流詩人・班婕妤(はんしょうよ、約二千年前の人)の故事にちなみ、扇にこめられた、けなげな娘の恋心を描く。

美濃国(岐阜県)野上の宿の遊女花子(はなご)は、春の頃東国に下る途中立ち寄った吉田の少将と契りを結び、また「あふ」ようにと互いの扇(あふぎ)をとりかえて別れてからというもの、他の客の座敷に出なくなり、怒った宿の主人に追い出されてしまう。(中入)

秋風の吹く頃、吉田の少将は東国からの帰りに野上の宿に立ち寄るが、花子は行方知れずになっていた。少将はやむなく都に帰り、まず糺(ただす)の森(下鴨神社)に参詣する。一方花子はあてもなくさまよううちに狂気し、いつしか都で人々に「班女」とあだ名されていた。恋人の形見の扇を持っている姿が、帝の寵愛を失った我が身を、秋になって不要となり捨てられる扇になぞらえて詩を詠じたあの班婕妤に重ね合わされたからである。

花子は今日も下鴨の社に現われた。正体を知らぬ少将の従者が「班女の扇は」と問いかけると、花子は捨てられた身の寂しさを嘆き、舞(中之舞)を舞い秋の再会を約束した恋人の不実を恨む。少将は花子と気づき、扇を見せてくれと従者に言わせるが、花子は大切なものだからと断る。少将が自分の扇を花子に渡すと、ようやく花子も相手が愛する人と悟り、二人は再会の喜びに浸るのであった。

## 能 山 姥 (やまんば)

「山姥」とは、山中に住むという想像上の鬼女。各地に伝わる民話などでは、人を喰う残忍な老婆として造形されることが多いが、能では深山幽谷の鬼気迫る神秘性を象徴するものとして描かれている。

都に名高い百万山姥という曲舞(くせまい)の遊女が、信濃善光寺(長野市)へ参詣の旅の途中、越後越中の境川から険しい上路(あげろ)越えにかかる。その時にわかに日が暮れ、一行がうろたえる所に、一人の女がお宿を参らせようと呼びかける。自分の家へ一行を招き入れた女は、遊女に山姥の曲舞を見せてほしいと頼み、また真の山姥とは何者かと問う。「山姥とは山に住む鬼女」という答えに、女は自分こそ山姥の霊鬼であるとうちあけ、歌舞妙音(かぶみょうおん)の甲いで安執を晴らしてほしいと願って消えてしまう。(中入)

笛の音も澄みわたる月夜となり、深山幽谷の狭間に、髪はおどろの雪の白さ、眼の光は星の如く輝き、面の色はさ丹塗り(にぬり・赤色)の、まことの山姥が出現する。山姥は人間を寄せつけぬ峻厳な世界の様、輪廻(りんね)の如く山廻りする妄執の境涯を語る(クセ舞)。そして煩惱即菩提(ぼんのうそくぼだい)と観ずれば妄執に凝り固まった姿であっても悟りの道につながると述べ、なおも山廻りしつつ深山の中に消え失せたのである。

小書「白頭」では、後シテ山姥の鬢が白頭に変わり、クセヤキリ等の謡に緩急が付き、動きも常とは違うものになる。

※ 事務局で許可した以外の方の写真・ビデオ撮影・録音はお断り致します。

※ 場内では携帯電話等の電源はお切りください。

※ 車でお越しの方は、京都観世会館東隣の有料駐車場をご利用ください。満車の場合は平安神宮前の市営有料駐車場をご利用ください。

主催 浦田定期能楽会

【次回予告】 令和2年 7月 18日(土)

能 「胡 蝶」 田中 隆夫

能 「遊 行 柳」 浦田 保親